

「こんにちはっすい！」

「い、じゃなくてうでしょ！」

「な、なぜ、その田んぼを発言する！」

「いけないのか？」

「私にわからない。」

「まあ、卵なんてそんなもんだよ」

「そうなんだ、乱視は多摩さんから産まれたんだね。始めて知ったな」

「そうかいそうかい。総会に参加しなさい。だったら飴一個あげるから、今日の煎餅をくださ
い！」

「それはどうかな？」

「ま、まさか！ その手は！」

「いや、手段って言ってよ。テイクツ。」

「ま、真坂！ その手は！」

「誰だお前！ テイクスリ。」

「摩、まさか！ その手は！」

「強制終了！」

をい。

「何？ ご飯食べたいの？」

違う、冒頭のあれは何だ。

「冒険の頭なんて知らないよ。いつも食事を使っているだけ。どうせそれだけのことなのに」
一瞬感じた閃きは彼女を襲った。ここまで言えば刑事のお前ならわかるな？

「もちろんですとも。ところで揭示ってここだよね？」

うん。この慶事をすることは大切ってことぐらいはわかる。

「だよね。いつも一緒に物事をやってたもんね」

そうだよね。あの日々が懐かしくて涙が出そうで。

「いつも一緒だったあいつ、どこ行つたんだらうね」

多分、今でも冒険をしているんじゃないのかな。いつものように。

「共にした時間は失われはしない。私たちが覚えていてるだけで彼は生きている。ただただそれだけのことなのに」

私たちはどうしてあいつのことを忘れてしまったんだらうなあ。

「涙は止まらなくて。彼を失ったショックは私たちを襲った。まるで祈る少女を見ていたたまれなくなるかのように」

私はどうしても彼の少女を見つけたかった。

「たつたの、たつたのそれだけのに。私はいつしか刑事のことを思い出していた」
あいつなら知っているかなって。だけど。

「どうしても必要っていつている限り、裁断は出されないっていうから、諦めたの」
あの日が懐かしい。いつも共にしていた人生を生きていくって決めていたから。

「きつとこれからも変わらない毎日が続くんだろうってわかったから」

ただのそれだけの人生に、一つのスパイスをかけて香辛料なんていらないうって思うのはどうしてだろうって。それだけを忠実に。

「いつしか見ていた夢を思い出す」

彼女を求めていた私たちはいつか夢を共有して一緒に世界を旅する。

「そして世界の中に答えを見つけたのなら、そこで一生を全うしよう」

どうしてもできないのなら、共にそこで世界を見つめるから。

「彼女だけを連れて来たあの日にあの人」

どうしようもない絶望感が私を襲うけど。

「それでも彼女は笑っていた」

私たちは泣いていた。

「苦しいって言っていたのに、笑顔で。笑顔で私の傍から離れていったから私は」
私も同じ気持ち。どうしても変わらない世界を作ったかった、それだけを今でも律儀に護つ

ている自分が情けないけれど。

「あの時の誓いの言葉を私は忘れないのだから」

共に歩んだ、その言葉をもう一度復唱して、これからを築いていこう。

「あの言葉は私たちの約束」

それは。

「笑顔が約束の言葉だよ」

そして、思い出したから。

「涙が溢れ出す」

もういない、彼女。笑顔で離れていったのは私たちの絆を守ったから。

「私たちを守るために、あの日々を送りこんで」

三人で誓った思い出はいつの日か大切な思い出に変わり、笑顔を作って祭壇で彼女の遺影を見つめる。

「そこにはいつもの笑顔があつたのだ——」

そして。

「私は始める」

私は止める。

「共に歩んだ道のりを旅として残した彼女の想いを全うするため」

私はこの地で暮らし。

「私はこの地から離れる」

こうして彼女は消えたのだから。

「笑顔が約束の言葉だよ」

その一言を告げて。

「今から行きます——」

今から一緒に暮らします——。

うん！

「へえ」

どうしたの。

「いやね、さつきトンボが飛んできた」

ちっ！

「どうして?!」

今、貴様に殺意を持ったよ。もちろんバナナで揚げ足を取るのはいないがな。

「ふうん。そんなんで僕に勝ったとも思つて？」

もちろんだとも。さあその手にあるバナナを持つてトイレットペーパーを盗むがいい。

「貴様！ どこでその名を知った！」

え？

「その手にある、トイレットペーパーという宝具を返さなければ、貴様に罪研がれるぞ！ さあ、おとなしく渡しなさい！」

えつと。僕が何をしたの？

「ある事件を彷彿させることが私には理解できなかった」

あゝ。僕ちん、何を？

「私は彼があまりにも憤つてゐる姿を見てしまい、愕然とする。その事実がトイレットペーパーの巻く頃にを参照くださいまし」

では、貴様にチャンスをくれてやろう。

「出番が変わってしまった不具合は彼女を何としてでもという言葉で締め上げた」

綺麗なお飯が食べたい、お母さん。早くトイレットペーパーを頂戴よ！

「どうしても眩きながら彼女は息子に一枚の写真を見せた」

あれ？ この人、僕のお父さんと一緒だ。

「どうしても眩きながら息子の頭を撫でるその行為が、彼女、いや、お母さんとして名の恥

ずかしいただのお姉さんは」

お父さんは僕を見捨てたの？

「泣いている。泣いている。今しがた気づいたって顔をしている息子を見て」

「ただ、お母さん。」

「それでもお母さんと言ってくれる息子に涙を見せながら、「なあに？」と声を恐れて言うしかなかった」

僕がお父さんの代わりになる。だって、それが子供のやることでしょ？

「ハッとしたお母さん。いつの間にか自分より成長した息子を頼もしく思いながら。そして本当のことを告げて」

日は経った。いつの間にか思い出を形にしてくれた息子に感謝しながら、時々お姉さんは思った。

「この子。やっぱりどこかで見たことのある顔。まるであなたみたいね」

いつしか未来へ羽ばたく息子の姿を見送って、そして離れていく、自分の息子を失うのが怖くて、いつも泣いている自分。

「そして、今でもお母さんと慕っている姿は笑えど、泣けはしない」
だから思うのだ。

「いつまでも子供だって思わないで」

だから子供なのになって、お姉さんはくすつと笑って。
「今日を過ごした」

いつしか本当のことを話すためにわたしは存在している。

「突然、何よ」

いや、別にね。ちよつと書店に行きたくなっただけ。

「なんのこつちや」

まあまあ、いいではないか、メイド。お茶を持つてきなさい。

「はゝい。お茶はいかがですか」

メイド。お茶を持つてきなさい。

「ふん、貴様の考えていることなんぞ、一目でわかるわ」

いいから、お茶を持つてきなさい。

「ええゝゝ、違うのおゝゝ?」

いい加減にしないと、お茶を自分で取ってくるよ?

「わかりました。お嬢さんの真似をしましょう」

わかった。お茶は自分の手で。

「いつてらっしゃい」

ところで。

「ここだけの話。私のことをどう思っている？」

綺麗な素敵で純粋無垢な楽しそうで天然なちよつとどじつこさん。

「だけど、彼女にはある秘密があったのだ」

は？

「私の名前を呼んでみてよ。そしたらわかるから」

えっと、メイドさん？

「そう、それが私の切り札。メイドという名のメイド。ある地にて産まれた異端児なのだ」

何よ。俺もお茶を取ってこよっかなあ。

「それでもいい。いずれ知るであろう真実に全てこれに記した。いつの間にか世界は変わらず、果てへと向かった暴走列車」

うーん。楽しそうだからその台本貸して。

「私は何も知らずに生きていただけなのに。それが罪だなんて。ふざけている
えええ。なにに。私の生きる道は一つしかない。」

「突然のように現れた嵐は全てを記しいつまでも世界のことを運命のように感じている」
いつの間にか現れてしまった彼を私の手で受け止めきけることはできなかった。

「彼女は何を手にしたのかは全く分からない。ただ、一つだけ言えることは」

おーい、お茶持ってきたぞ。

「あ、はい。いつもどじっこでごめんなさい」
なんだったんだ。

「どうしました？ 私はいつものようにあることに執着してただけ。自ずと知れた本当のこ
とを話そうとしたけど」

ん？ どうした？

「いえいえ、マスターはいつも嘘をつかないって」

……。

「さあ、今日から新しい一日の始まりだ」

そっか。そうだよな。

「そうですよね。ご主人様」

ああ！

さて。

「どうしたの？」

メイド役もしたし、なんか他のことをしたい人間にはどこにいるのかなあ。

「何もないよ。ただただ、地味なおっさんがこんなへんてこりんな地道な努力を務めているこ

とがとても大変なことなんだよって」

言うぐらい？

「おじさんてきにはね」

でも、それじゃあ、瑕疵ある存在を知らないことになるじゃん。

「それは著作権がかかりそうでかからない不思議な言葉だね」

そう？ 私は至って平凡なデブおじさんで狸のマークを付けている素敵な変人だよ？

「あなたはおかしい。笑って心を開いてよね」

心はいつも遠くにありました。

「だから著作権を護りましょう」

保護下にあるのだから仕方ないじゃない。

「今度は何ネタ？」

え？ そういうことだったの？

「確信犯。ここに在りー！」

それもじゃない？

「うるせい！ 私の邪魔をする奴はトイレットペーパーを投げて、爆発させてやるぜ！」

トイレットペーパー？ ふざけるなあ！

「彼の怒声は、トイレットペーパーを丸く回していき、綺麗な一つの思い出を胸いっぱい広

げた」

トイレット！ 貴様にトイレを貸してしまったのは失敗だった。

「これはなるようにしてなったことだ。失敗もくそもない」

くそう、今度はジャンパーを失ってしまうだど？

「いずれ起きるであろう世界の理を私の手で最後にしてあげたくて」

どうしても起きるそんな世界のことを私は知りたくなかった。

「だけど世界の変遷の中、厳しい現実を知ってしまった、彼女を救うものはもうどこにもいない」

決して失ってしまったものは大きくないと何度も自分に言い聞かせた。

「それでも世界は変わらない。変遷だって、それこそ、変化だと誰もが思った」

だが世界は無常にて非情。運命を振じ伏せることぐらい容易いこと。

「笑っている悪魔」

泣いている天使。

「どうしても焼き払われる煉獄の中で凡凡を鳴らしている木闍の世界はこうして失われていく。

私の故郷を返してよ。

「彼女の運命はもはや、何もできないでいる、彼の同居していた世界を作っていた。いずれ生活することができなくなると知っていたから」

私が何をしたのよお！

「彼女は泣いている。彼は鳴いている。そして家の扉が開かれる。そこには樂園が広がっている。」

「彼女はただ茫然と。そして彼は啞然と」

最後の世界の変遷は、彼女を救って。

「一人取り残された、彼は煉獄の中で苦しみ続け」

世界は笑った。

「煉獄も笑った」

いずれ知るのであろう世界がこんなにも美しかったのだと」

「誰が知るのだっただろう」

彼女はうるうる涙を浮かばせ、そして。

「小さく微笑んだ」